

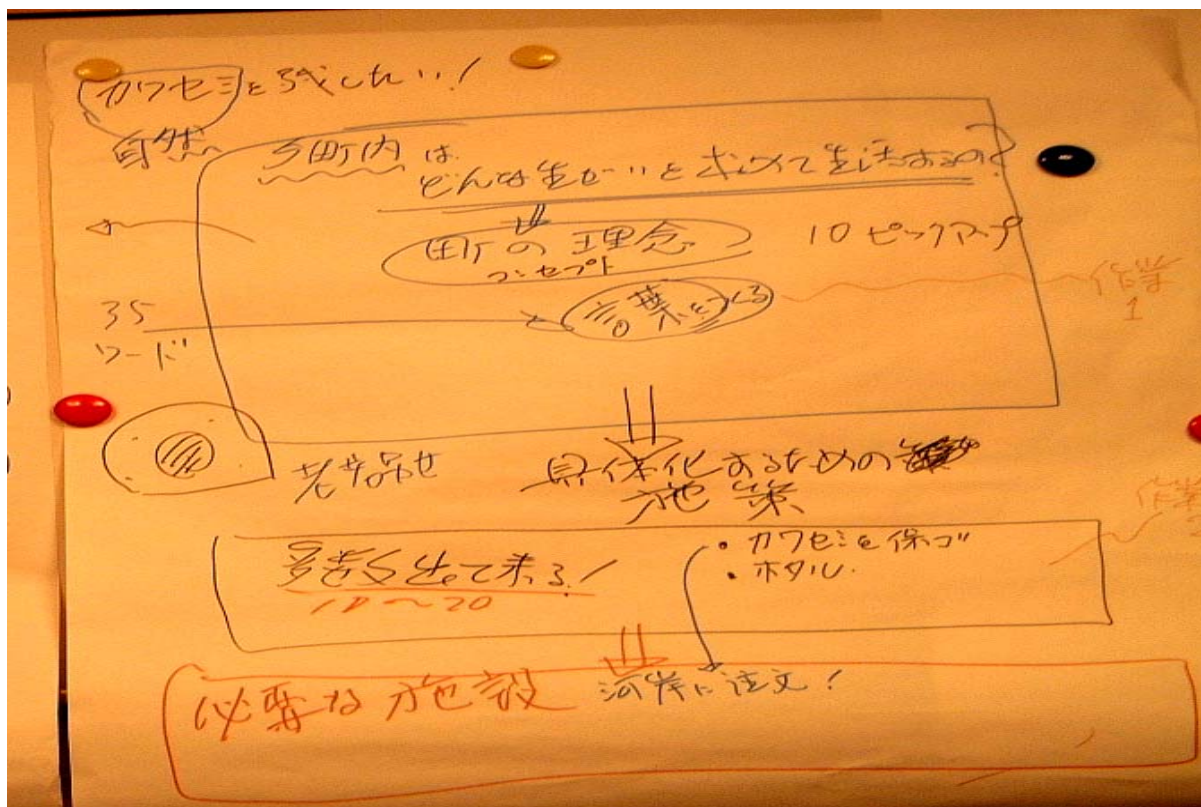
勝尾寺川プロジェクト会議の記録 2001/11/27 13:30~17:00

場所:大阪凌霜クラブ

参加者:加藤、角野、酒井、駿河、松下、中尾(50音順)

(1)第1ステージ ワークショップの枠組み

図-1に示すような手順および地域性を評価するためのキーワードが提案された。

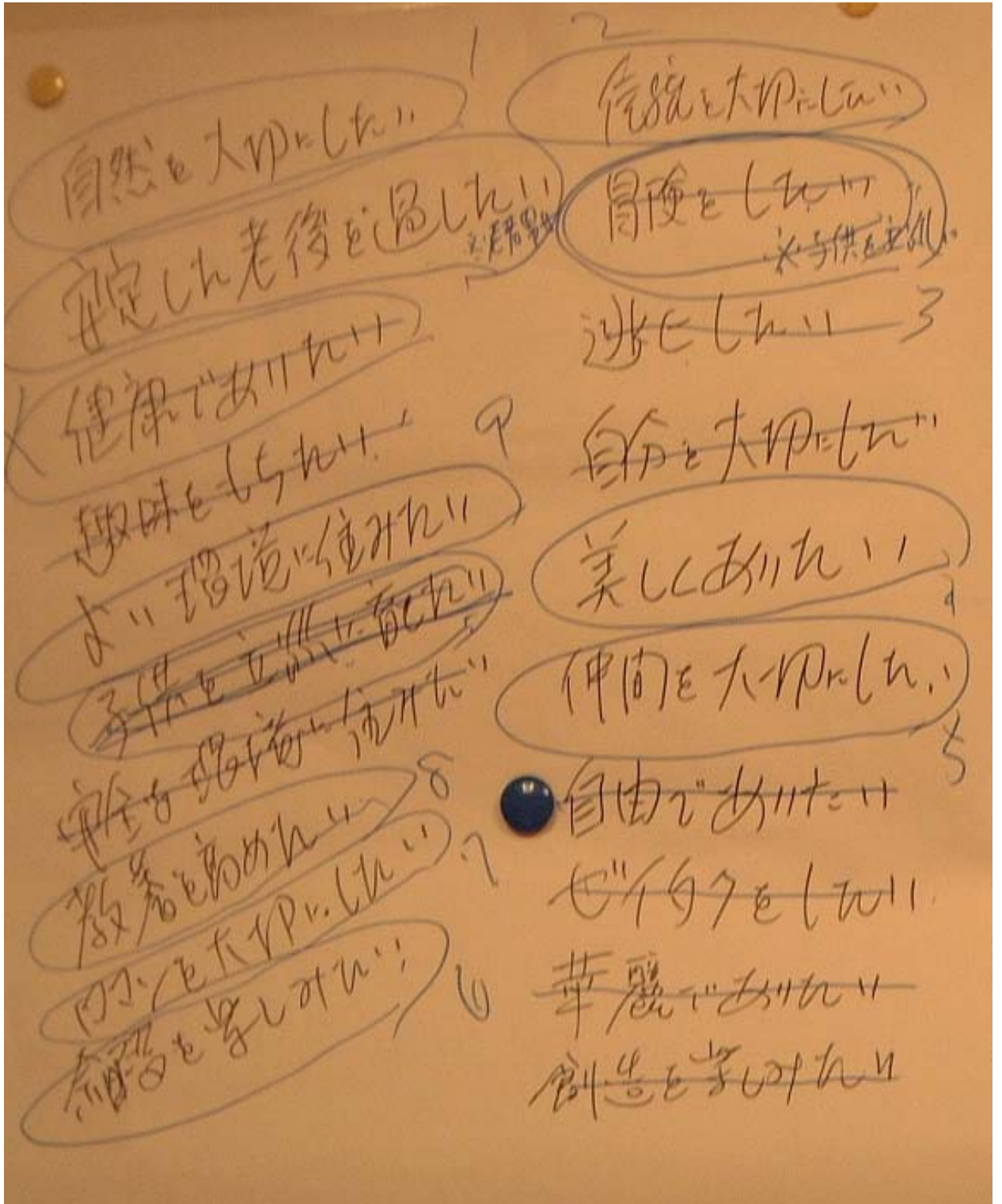


地域・空間を考える35のキーワード

- ・自分を大切にしたい・健康でありたい・美しくありたい・若さを保ちたい
- ・よい家庭を作りたい・子どもを立派に育てたい・安定した老後を過ごしたい
- ・多くの収入を得たい・経済的に生活したい・仲間を大切にしたい
- ・社会的な地位を得たい・自己顕示をしたい・華麗でありたい・ゼイタクをしたい
- ・流行に参加したい・個性を育てたい・プロでありたい・教養を高めたい・余暇を楽しみたい
- ・趣味を持ちたい・創造を楽しみたい・楽をしたい・伝統を大切にしたい・自由でありたい
- ・自然を大切にしたい・よい環境に住みたい・社会に奉仕したい・質素でありたい
- ・冒険をしたい・逃避したい・変身したい・ロマンを大切にしたい・安全な環境に住みたい
- ・ひもじくなく寒くなくありたい・戦争のない社会でありたい

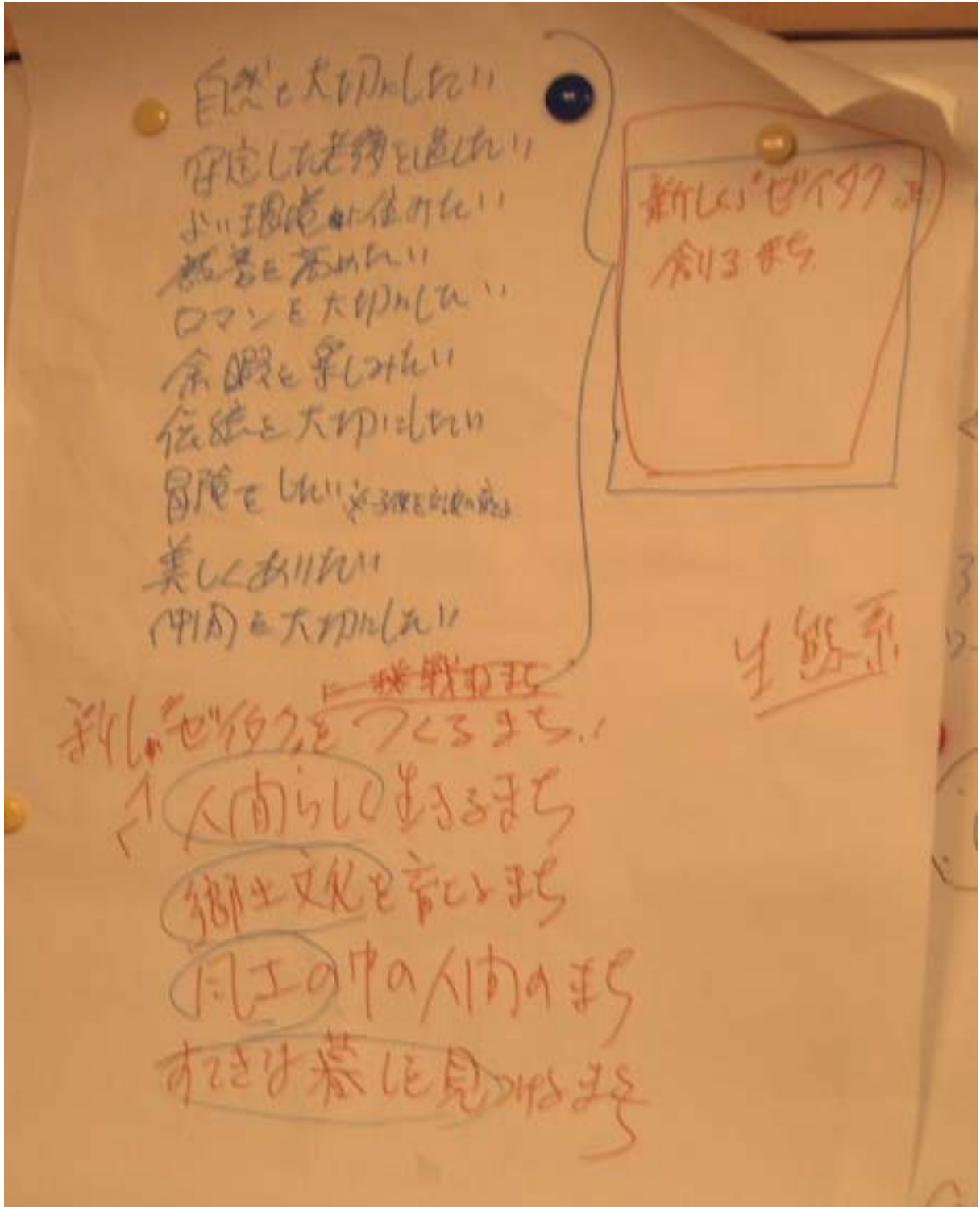
(2)第2ステージ キーワードの選択と討議

図-2 35のキーワードについて、各自が地域についてふさわしいと考えるものを10個ずつ選択し、種々の討論の結果、図-2のようなキーワード群が残った。



(3) 第3ステージ キーワード群から地域の将来方向を示す基本テーマの抽出討論を図・3のように行った。

その結果として、とりあえず「新しいゼイタクを創るまち」基本テーマとすることにした。



「新しいゼイタクを創るまち」の意味するもの 酒井の解釈メモ

12/14 討議の素材として

20世紀には基本的に右肩あがりの将来像に向かって邁進してきたと思う。

そのことに、われわれの大半は、それに生きがいを感じてきたと思う。

そして、一定の豊かさを獲得したものの、なにか満ち足りない空虚感のようなものを感じ続けてきたのではないのか。

しかし、今、われわれを取り巻く環境はさらに様変わりしたと思う。

その様相は、われわれがやってきた結果が、必ずしも輝かしいとばかりは言えない不気味なものになりつつある。バブルの時代を通じて、日本人の特に金銭にまつわる倫理観が崩壊した、その結果として、あらゆる側面で精神の退廃のようなことが起こっているとさえ思える事件に事欠かない時代になっている。

バブルの時代にできたホテルのロビーに施された金ぴかの装飾などに象徴されるような豊かさが、いまは馬鹿げて見える時代になりつつある。今の日本の経済力ではとてもそういうゼイタクは考えても見られなくなっている。結局は、身の丈に合わない借り着でしかなかったのではないのか。(もっとも一方では貧富の格差が大きくなっている側面もあって富裕層にはあるかも知れないが)

いま、われわれはそういう状況に気づきつつある。金ぴかのゼイタクよりもう少し身の丈にあった豊かさの方向を探しはじめたところではないのか。

ここに出てきたキーワードであらわされる地域や空間、人間関係のイメージは、自立的な市民が、自前で考えて自ら創ろうとする、決してぎらぎら金にまみれたゼイタクではないものを模索し始めようとする兆しではないのか。決して、沈滞した楽隠居の世界ではなく、こころ躍り、かつ安らぐ健康な知的なものをイメージすることのように思える。そんな感じを「新しいゼイタクを創るまち」というワードに託したいと思うのである。

図-4 活動を支える制度(仕組み)の例示
地霊のようなものの存在？

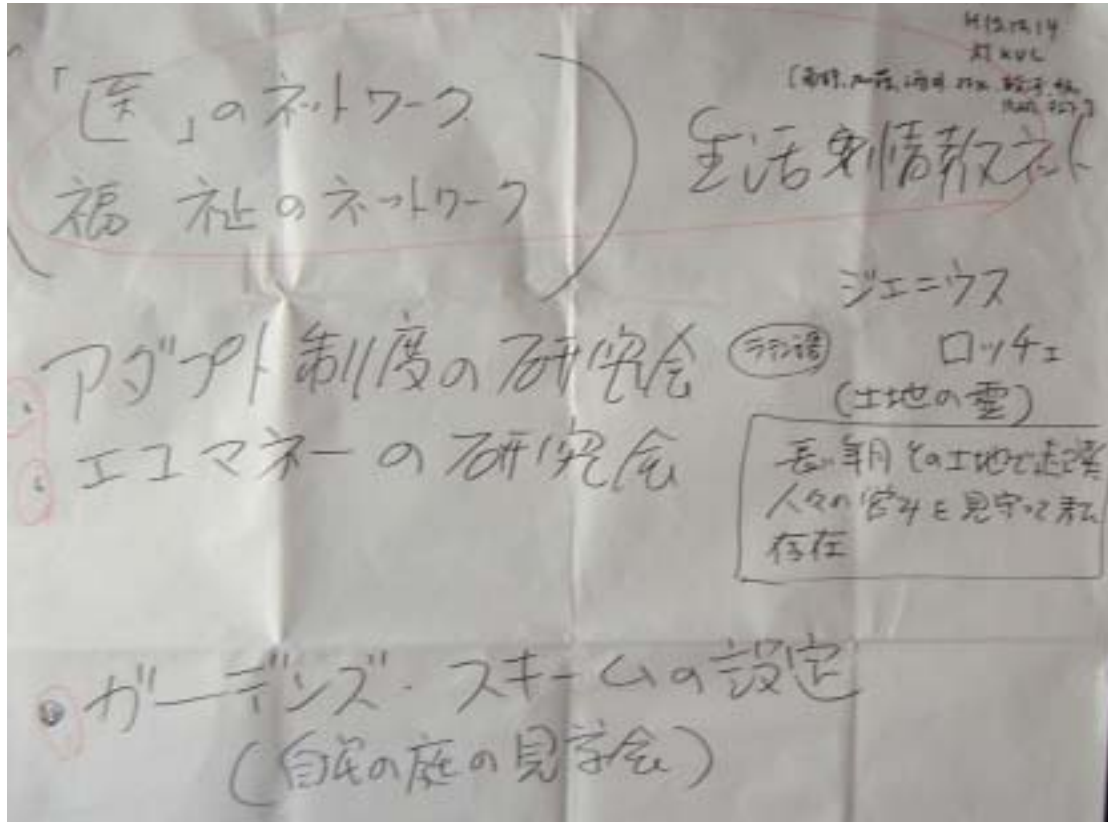
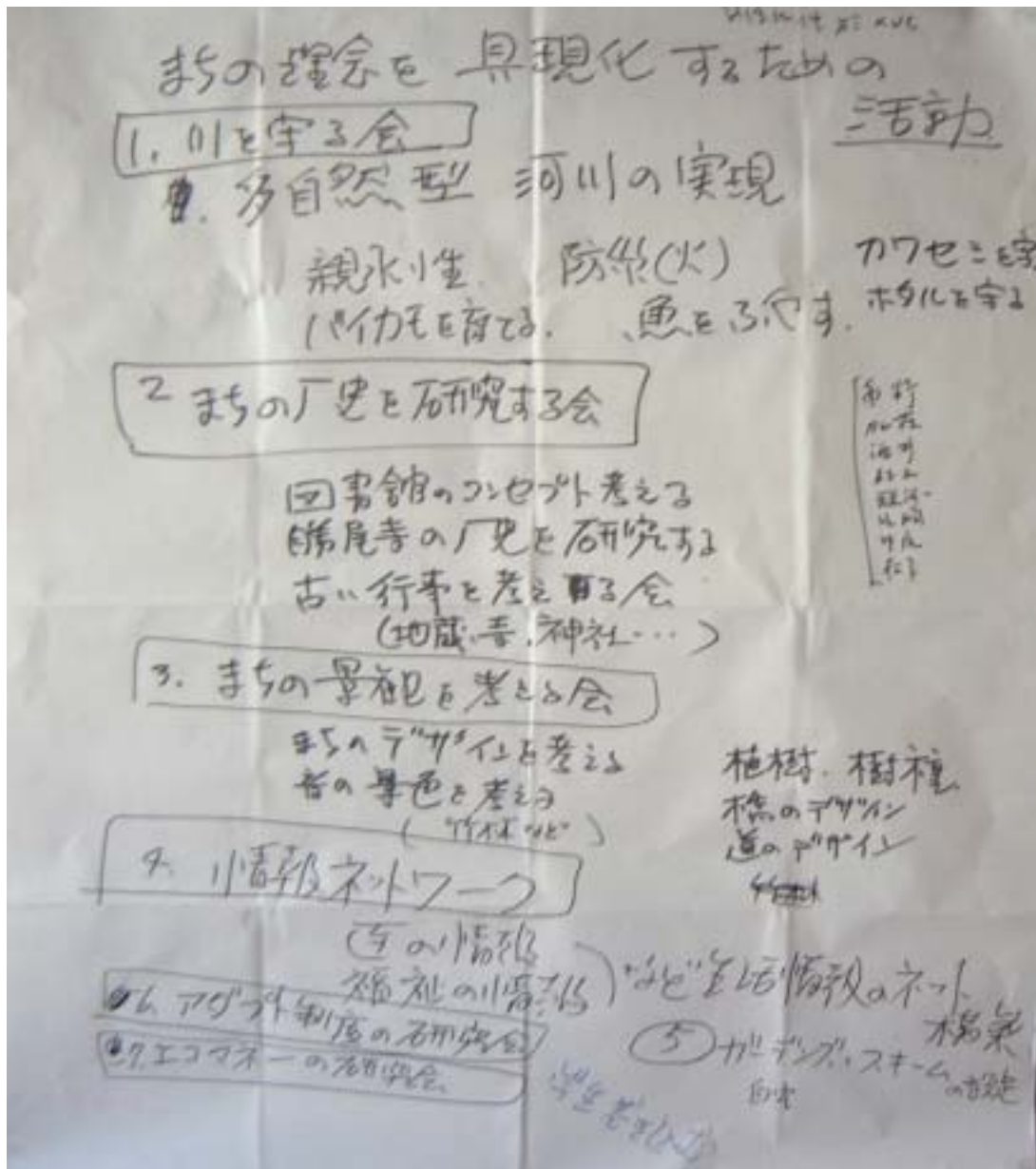


図-5 以上の討議結果を活動群としてまとめたもの 大きく7分野の活動分野として分類整理された。

次回(2002年1月15日13:00)の会で、活動を受けとめるあるいは活動に必要となる施設(ハード面)、制度(仕組み)等の議論をすることにした。



勝尾寺川プロジェクト会議の記録(3) 02/1/15 13:00 ~ 15:30

場所:大阪凌霜クラブ

参加者:角野、加藤、中尾、酒井、松下、駿河(順不同)

前回のワークショップの結果を受けて、それらの活動を支える施設の提案に話をしばって討議を行った。

冒頭、このワークショップの意義についての疑念が提起され議論をおこなった。議論の主たる内容は、なぜこの地域のことにこだわるのか、一般的普遍的な提言、提案を世の中に出していくのが本筋ではないかという問題提起であった。それに対して、こういう地域をモデルケースとして議論を展開し、一般的普遍的な課題を見いだして行く試みをやっていること、また、この成果について具体的に地域の活動のヒントとして発信して試みて、CVV としての関わり方など実験的に取り組んでみるということ、おおむねこんなこととして了解した。

この地域の施設体系を、考える地域的広がりをするかの議論を行った。その結果、現地観察を行った勝尾寺川河川空間を周辺流域地域の共有の空間としていかにに活用するかを中心的な提案とすることにした。

図-1は討議のメモである。河川敷を対象地区と考え、どのような施設を

図-1河川敷の施設の考え方メモ

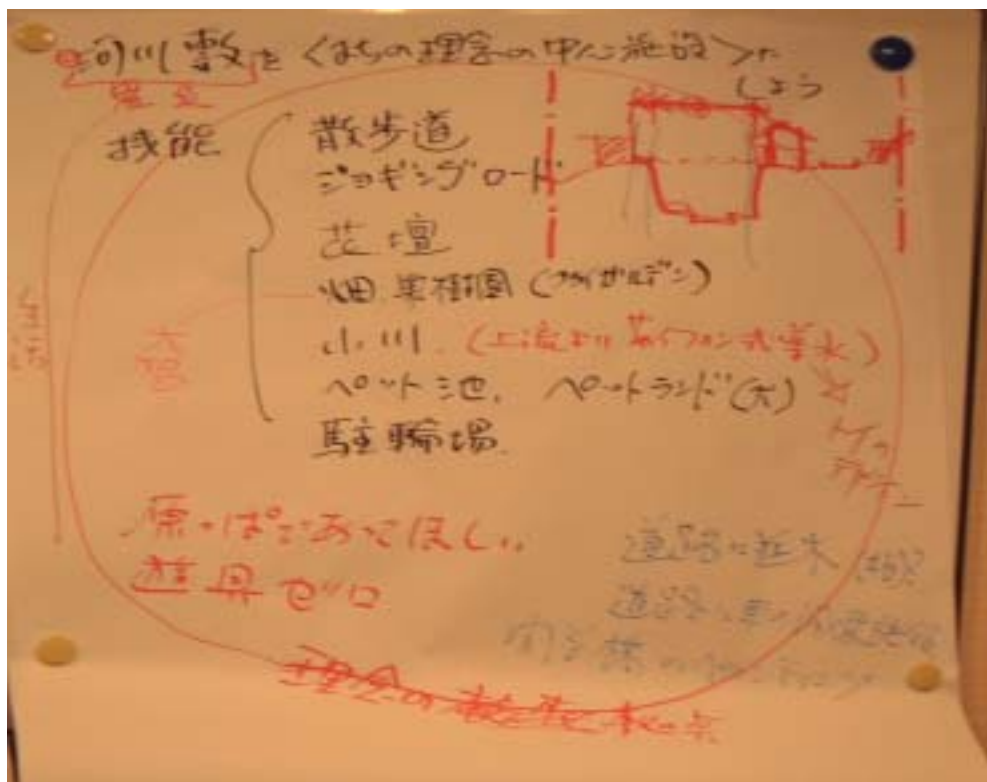
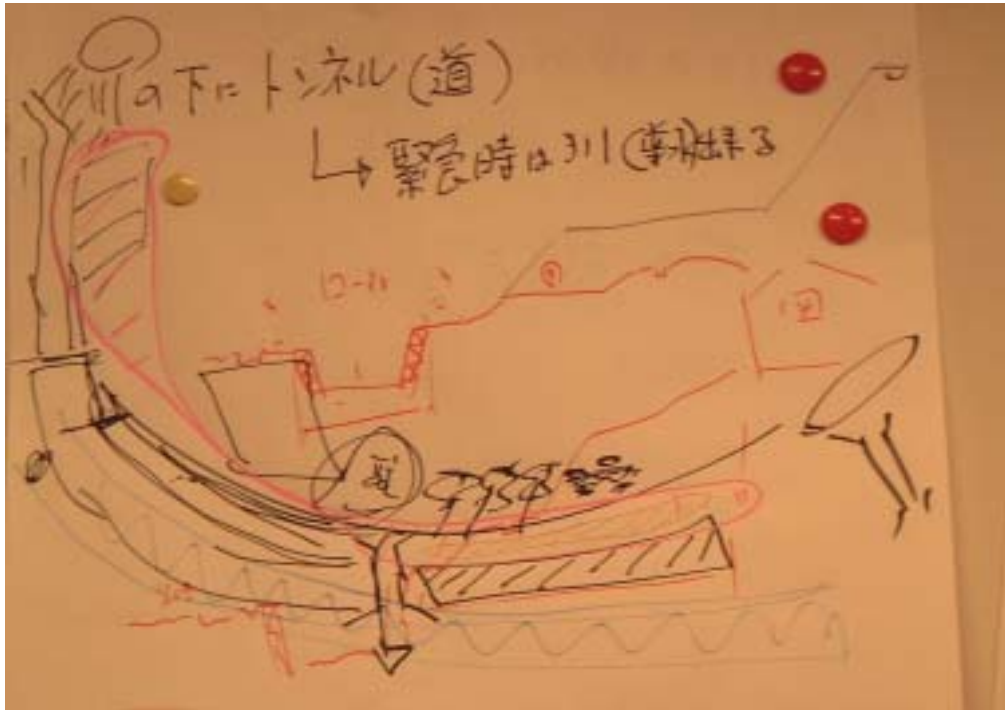


図-2河川敷モデルコンセプト図のイメージ

以上を簡単なモデル図としてまとめることにする。



今後のこと。

以上の検討結果に加えて、こういった施設体系を育むための仕組みの事例、提案を検討する必要がある、その結果をレポートとしてとりまとめること。松下さんから地元のしかるべき活動グループを通じて検討材料として提供するとともに協力を申し入れたらどうか。